

7-9

文楽座又千之

文楽秋の
新作興行

故才九師團七聯隊林少將墓



文楽座

御 挨拶

爽涼の秋を迎へてみなさまには御勇健にゐらせられ欣幸の至りに御座ゐます、
本日は御光來下さいまして有難く感謝いたします。

此度滿洲事變一週年記念に方りさきに大阪朝日新聞社に報導されたる上海戦秘史の林聯隊長、空閑大隊長の悲壯の戦死に絡る尾山大尉の幻影の命令を脚色編曲したる新作氣分横溢の盛觀に人形淨瑠璃の新動向を示したる「其幻影血櫻日記」と映畫「最後の審判」を大阪府中等學校校外教護聯盟と協力し、マチネーに特別開演して學生愛護の一端に資したので御座ゐます。

何卒、私等の意のある處を御諒承下さいまして益々斯道啓發のため支持鞭撻の程偏にお願ひ致します。

白 井 松 次 郎

海上戦秘史 —に中最眞の戦激—

呪ひの幻影

高熱に悩む尾山中隊長が
闇に聞いた『後退命令』

金澤聯隊の悲

陸軍ではよく「海軍の敗北は戦艦沈没に着手することになつたが、海軍では近世戦史上稀れに見る軍艦官の陣亡、艦長の戦死、大艦長の自刃など多量の陣中悲劇が繰りまわされてゐる。しかも大艦長の全部、向艦長の自刃、艦隊長の戦死、尾山中隊長の戦死——この三つの悲劇には戦史上未曾有の原因が秘められ、

戦場には現れた一つの幻えぬ運命の網を引いての實が明確に認められ、戦場に於ける運命の網を引いての實が明確に認められ、戦場に於ける運命の網を引いての實が明確に認められ、



故林少将 故空閑少佐 尾山大尉

二月二十二日

午後九時半には機雷艇の東方百餘海里に居た。空閑大隊長は部下尾山中隊長一大隊の率ゐる艦隊を率ゐる。空閑大隊長は部下尾山中隊長一大隊の率ゐる艦隊を率ゐる。空閑大隊長は部下尾山中隊長一大隊の率ゐる艦隊を率ゐる。

幻を見た時空閑少佐倒る

今は郷里に謹慎の尾山大尉

阿修羅の如く
戦艦に尾山大尉が高熱のためか、突然と中隊の司令を執つた。尾山大尉は高熱のためか、突然と中隊の司令を執つた。尾山大尉は高熱のためか、突然と中隊の司令を執つた。

した、これより尾山大尉は全く生還してゐる。尾山大尉は高熱のためか、突然と中隊の司令を執つた。尾山大尉は高熱のためか、突然と中隊の司令を執つた。

尾山中隊長は出陣前、戦艦を率ゐる。尾山中隊長は出陣前、戦艦を率ゐる。尾山中隊長は出陣前、戦艦を率ゐる。

我戦史空前の
尾山中隊長は出陣前、戦艦を率ゐる。尾山中隊長は出陣前、戦艦を率ゐる。尾山中隊長は出陣前、戦艦を率ゐる。

大坂新日新聞所載
食津浦北脚色
編譯友次郎作曲
上海戦秘史
其幻影血櫻日記
尾山大尉出征の場
殿家椿戦闘の場
江灣鎮壘濠の場
南京衛戍病院の場
空閑少佐自決の場
新聞キネマ特作 伊南 弘 監
最後の審判 八巻

現役から
を佐少閑空
「上海特電」
空閑少佐は、
日艦から海軍
支那艦隊に加入
艦隊として佐少
艦隊を率ゐる。空閑少佐は、
日艦から海軍
支那艦隊に加入
艦隊として佐少
艦隊を率ゐる。

上海戦秘史 激戦の眞最中に

呪ひの幻影・・・

高熱に悩む尾山中隊長が聞いた「後退命令」

金澤聯隊の悲劇

陸軍ではいよ／＼上海事件の記念すべき戦史編纂に着手することになったが、同事件には近世戦史上稀に見る軍司令官の陣歿、聯隊長の戦死、大隊長の自及など数多の陣中悲劇が織込まれてゐる、しかも空閑大隊の全滅——同隊長の自及——林聯隊長の壮烈な死——尾山中隊長の割腹——この一連の惨劇には戦史上未曾有の原因が秘められ、戦場

現はれた一つの幻影が眼に見ゆる運命の糸を引いてゐるさいふ事實が明確に認められ陸軍當局もこれを嚴秘に付してゐるが、今度の戦史にはこの秘史を特筆して永遠に記録し今後の用兵上の貴重な研究資料とするこゝになつた(東京電話)

大隊長はその麾下として江灣鎮西北方の敵を撃滅すべく躍進また躍進
二月二十二日 午後九時半には嚴家楮の東方二百メートルまで敵地深く進入し後方との聯絡は全く絶えた、空閑大隊長は部下中隊長尾山豊一大尉の率ゐる一隊と機關銃隊を指揮して必死の奮戦をつづけた、しかるに何たる運命の呪ひか、尾山中隊長は出征前重い肺

を病み戦線での死を期し上司に懇請して出征してゐたが、折悪しく江灣鎮攻撃開始の数日前から四十度を上下する高熱に悩まされてゐた、それが強敵七十八師の重圍に陥つたのである、彈丸は盡き糧食なく將兵は二日二晩全く絶食の状態にあつた、闇を貫く十字火は縦横に味方を雍倒し砲彈は炸裂する、闇に腹衝ふ部下は遠く近く無氣味な呻き聲を立て、死んでゆく、恐るべき最悪の場合
阿修羅の如く奮戦した尾山大尉も高熱のためか、呆然とし半ば夢のごとく現

のごごく見えた、その瞬間突如闇に空閑大隊長の姿が現はれて「尾山大尉!!もう駄目だ!!再舉をはかつてくれ」と悲痛の一言を残す。忽然として姿は消えた。ハツと我に返つた尾山大尉は大隊長が各部隊に同一命

命を下すために走り去つたものであると思ひ直に部下に退却命令を下した、これより先空閑大隊長は辛くも生残つてゐる若干の機關銃隊の一部さうもに敵地の奥に取残されてしまひ、夜又王のごごく奮戦したが、數

度の敵の逆襲で遂に部下さにも枕を並べて倒れ假死のまゝ敵兵に捕はれ武人一代の恥辱を被る身となつたこの前線の不結果が原因して、遂に林聯隊長の悲壯な戦死となつたものである

によるものであると深く責任を感じ三月初旬同病院で自殺を企てたが發見され、手當の結果蘇生した、これと前後して空閑少佐は支那軍から上海派遣隊に送還され同様岡村參謀副長の取調を受けた、その際空閑少佐

幻を見た時空閑少佐倒る

今は郷里に謹慎の尾山大尉

戦線から後退した尾山大尉の容態はいよゝ悪化して上海兵站病院に收容された軍司令部では戦線の豫想外の遺算を重大視し當時の岡村參謀副長自ら病床の尾山大尉を取調べた結果空閑大

隊長が人事不省に陥つて捕へられたさきと尾山中隊長が後退を決定したのさげ同時刻であつた點その他の状況から推して尾山大尉が激戦の惨禍中に高熱に冒され幻影を見て後退したことが

我戦史空前の事實に直面した、その後空閑少佐捕はれの報を傳へ聞いた尾山大尉は同少佐に絶望的な汚名を被せ林聯隊長を戦死させたのは一切自分の錯覺

現役から退きたい旨

を上司に告げたが、これより先同大尉の行動を知つた中央部では事情の如何に拘はらず結果から見て許し難いので直に官位を剝奪した、その後同大尉は獨り寂しく凱旋、郷里石川縣大野町で謹慎の日を送りひそかに林聯隊長と空閑少佐の冥福を祈つてゐる。

稀有の出來事

岡村少將語る

これについて直接空閑少佐尾山大尉の取調べに當つた岡村少將は語る

空閑少佐捕虜——自及に ついては眞因があつたと思 議な精神作用によるもの

であることは全く一般には知られてゐない、私をはじめ尾山大尉の陳述はをかしいと思つたが詳細な調査によりそれが事實であることがわかつた戦場ではよほご豪膽な人

でも幾分精神的な變化がある、況んや四十度前後の高熱に惱まされ、しかも悲惨極まる最悪の場面が展開する幻影に惱まされるのも無理はないと思ふ、結局あの惨劇の眞因

空閑少佐を

抱介したの

は 東洋精神から

東京赴任の途上に語る

【上海特電三十日發】

三十日朝六時上海をたつて日本に向つた秩父丸に二三人の支那軍人があつた、そのなかの一人の青年將校こそは上海事件で悲壯な武運に劇的な生涯を終つたわが空閑少佐を當時互ひに敵でありながら東洋精神の本然にかへつて庇護し空閑少佐が三月十六日南京から上海に送還されるまで世話をした支那陸軍少佐甘介瀾氏である

甘氏は今回駐日支那公使館附武官支那陸軍少將楊庭溥

氏とともに武官補佐官として赴任することになつたの

だ、中肉中脊白哲で鼈甲の眼鏡をかけカッターシャツ

は激戦の惨禍にあるのだ何れをもせむべきではない、たゞ戦史上にも稀有のことであり特に今後の用兵上慎重研究すべき問題である

に平服を着た

スマートな

いでたちで
ある、黄浦口の涼しい風が
吹き込む秩父丸のサルンで
本社特派員の質問に答へな
から語る

二十九日上海でお國の海
軍武官室を訪ねましたこ
き空閑少佐のこゝを書い
てある雑誌を見せてもら
ひました、あれは大分事
實と違つてゐるところが
あるやうです、私が空閑
少佐に會つたのはあの時
がはじめてで、私が命令
で南京から無錫に行つて
そこではじめて空閑少佐
に會ひました、少佐の受
けられた彈丸は右の上腹

部から入つて春中に抜け
て非常な重傷でした、應
急手當ののち無錫から宜
興に移されました、私は
空閑少佐と同車して宜興
から南京に自動車で向ひ
ました、その途中

土匪が出る、こゝいふので

悪い道をスピードをかけ
て走らせましたが、ひご
いバンドでこの通り右
の額に疵を受けました、
その時空閑少佐もひどく
心配して呉れました、思
へばこれは少佐の記念で
す

と言つて甘氏は暗然として
額の疵あさをなでながら

日本に行つたら必ず空閑
少佐のお墓に詣り御遺族

を訪問します、私が空閑
少佐のお世話をしました
のは人道上からです、東
洋精神に本づいたのです
と語つた。

(本稿昭和七年八月一日大阪
朝日新聞掲載記事より抜萃)

尾山大尉出征の場

豊竹つばめ太夫

豊澤仙糸

人形

尾山大尉 吉田玉松

父 奥三次郎 吉田玉次郎

娘 鈴子 桐竹紋司

大尉妻 かね子 吉田文五郎

大阪朝日新聞所載
食満南北脚色
鶴澤友次郎作曲
上海戦秘史
そのまぼろしちまぐらにたつき

其幻影血櫻日記

尾山大尉出征の場

天下道あれば走馬を却けて糞車
を用ひ天下道なければ戎馬郊に生ず
こかやされば隣邦道にそむき上海の
變こゝに起り出動の命九師團の七聯
隊は勇み立つ中にも尾山豊一大尉不
治の病にかゝり舟楫さへ儘にならぬ
身も現役の勤め出動を上げます父の
與三次郎名に大野町往來に往きかふ
旗は出征を祝す萬歳歡呼の聲思はず
さそはれ尾山父子一間を立出で表を
見やり、詞豊一お前あれを聞いたか
この大野町からも大分に出征するも

のもある何と云ふ仕合せな事であら
うわしも昔日露戦役に従軍して名譽
の凱旋をしたものだがお前も必らず手
柄してめでたう歸國をまつてゐるぞ
ハイお父さん私は云ひ甲斐ない事で
すが幼年學校當時から胸膜炎で佐々
木先生からもいろいろ注意を受け
て居ります、それでは又病氣が起こ
つてゐるのか、イエさうではないの
ですがナアニ自分は病の爲に倒れた
くはありませんでに林聯隊長殿空
閑大聯隊長殿からも命令は受けて居る
のです自分ばかりとお父さん同様立
派に名譽の殊勳を立て、無事に歸國
いたしました、しかし無事に歸國など
さいふ言葉は軍人の出征に望み口に
すべからざる事かもしれませんが御
両親始め妹のお咲又妻のかね四つ

と二つの姉妹この家庭は誰か見て行くのでせうお父さん自分ば命を二つにつかつて、きつと勳功を立て、歸ります御安心下さい健氣に云へど心には是今生の別れぞと、口に云はれど此身にて何の凱旋なるべきぞこのみ込む涙一間より妻はぐわんせも泣く兒をかへ、あの賑やかな萬歳の聲もしあなたもいよく御出征なさるのでありますかフム自分は第七聯隊第五中隊長として上海へ出征する父母の事、妹の事さうして二人の子供の事一切お前に頼んで置くぞ、イエおまち下さりませ佐々木先生のお話ではもし大尉が戦地へお出でになれば御持病が再發して取りかへしのかめ事にならうそれに此頃は胸の痛みを押しかくしさあらぬ妹も騒は

がしき事變の前にいたつきを包む心を押はかる、どうぞ師團へお届けして留守の部隊へ編入のそれも病の爲ぞかし必らず卑怯と思はれなごれん、この御心づけト云ふに與三次郎膝すませ、初めて聞いた此頃の容態名譽も報公も何も第一は命が元手、イヤお父さんコレ兼子お前も何を云ふのだ醫者は醫者の職務そんな事を云ふても今は非常時だそんな常識な判斷によつて行動がされるものか莫迦な、イエ、今日は昔さば違ふておりますわれから灯に入る難治の重病御國の爲さば云ひながら動きも儘に情なや何のお手柄立てられうせめては醫師のお許しまち御出征も遅かるまじまづそれまでの御養生よもや不忠と云はれまじ、このいたい

けの子供まで父のない兒になされうさか御分別をささしつくる夫を思ふまごころに争さふ妻さ不忠さは見やれどわれも戰場に屍をさらし國恩の萬分一に報ぜんさかたき決意もそれぞさばあかしかれたる心の苦しむいたいけな手に軍刀をかき抱きたる姉の鈴子父の前へ手をつかへお父さまおまへは戦争に行くのかや嬉しいく、と四つになる兒の健氣さに互ひに顔を見合はして勵まされたる父の聲豊一家庭の事はこの父が引受けた必らず後願の憂ひなくお國の爲に思ふ儘働いてくれよ、左右の袖に妻さ兒がさりつく二世と一世の別れ又もや聞こゆる萬歳の聲にスツクま立ちあがれど思はず咳きくる胸のなやみゴホン、アもしあなた、エ

嚴家楷戰鬪の場
江灣鎮塹壕の場
南京衛戍病院の場
空閑少佐自決の場

空閑少佐 竹本鏡太夫
尾山大尉 竹本相生太夫
甘介瀾 竹本相生太夫
鈴木中尉 豊竹呂太夫
小林特務曹長 豊竹つげめ太夫
支那那兵 竹本淀路太夫
支那那兵 豊竹辰太夫
支那那兵 鶴澤友次郎
支那那兵 鶴澤福太郎

空閑少佐 吉田榮三
鈴木中尉 吉田玉幸
尾山大尉 吉田玉龜
小林特務曹長 桐竹政十郎
甘介瀾 桐竹紋十郎
兵士瀾 大竹紋十郎
支那那兵 大竹紋十郎

人形

八雲 鶴澤友次郎
鶴澤福太郎

イお前は軍人の妻でないか、ハイお父さん行つて参ります、立派な戦死を、エツ、イヤ戦地では身をいさふてくれ、ハイお母さんにも妹にもお目にかゝれないかもしれないねとお前からよく傳へて置いてくれ、ハイいぶん御無事でオツ萬歳を唱へて出征するぞ、さらば〜と立上り振切り出づる我家の軒萬歳の聲悲壯の別れ泣く末の兒のあはれの聲あこに見捨て、出て行く。

嚴家楷戰鬪の場
江灣鎮塹壕の場
南京衛戍病院の場
空閑少佐自決の場

はや戦端は開かれぬ連絡絶て敵陣へふかくも乗入る空閑少佐左右股肱は

すでにばや大半斃れのころはわづかに三十有餘不眠不休の戦ひに苦闘はつゝ三日三夜叢る敵兵斬拂ひ副官くハイ鈴木中尉まだ生きのこつてゐたか、ハイ逆襲の敵は追拂ひましたシテ尾山大尉の一隊はごふした恐らく、例の胸膜炎それに肺炎さへ併發したそうですから敵彈よりは病に倒れたさ思ひますフムさうか林聯隊長殿の身邊も甚だ危険だ各隊の聯絡のされない事は残念だ。それに兵も三日に涉つて絶食です逆襲又逆襲殘餘の兵もわづかです大隊長殿チ、今が最期だハイ、鈴木中尉ハイわしはわしの父から幼年の頃葉がくれ論語を教えられたこれは佐賀傳統の武勇に鍛えた武士の爲に作られた金言集だそれによるさ後日死期を早ま

つたさ云はれても武人の面目は死す
べき時に死ぬのだ死に遅れたま云は
れるよりは遙かにまさる筈だ副官ハ
イ佐賀論語の生きて働く時が来たぞ
ハイ敵陣へ斬込んで湊川に於ける大
楠公の壯烈の最期を見ならふのも愉
快だナ大隊長殿オツ大日本帝國の爲
だ鈴木中尉一步も退くな昭和七年二
月二十二日我等の骨は巖家権に埋む
のだ全員突撃

あら無惨恨みなのこし敵中に屍をさ
らす空閑少佐それと見るより馳けよ
る敵兵ヤツ日本鬼子くヤツ戦死し
てゐるあるかよるぞ起きて斬られる
よくないあこへくイヤ大丈夫ある
死んで日本の大將も斬ることない
これなら大丈夫ある捕虜にして手柄
にするヤンデーたくさんくれる事あ

るなうつかりよつては恐ろしいこ
ある、リイベントイズ恐ろしいぞ
く大丈夫あるく皆がヤムくぞ打
寄つて擔架にくくし月くらき木の間
へはこぶぞ是非もなし

M 各隊こにちりくく南普橋の
東端そのクリークの線にそひ空閑大
隊は前進す尾山大尉のひきぬたる五
中隊は敵兵の重圍をうけて難戦苦闘
七十八師を目前に糧食つきて二日二
夜連絡絶えし孤軍の奮闘中隊長尾山
豊一眞近く敵彈炸裂の音にムツクこ
起上り濁わき切つたる聲はりあげタ
誰かあるかハイ居ります誰かハ小林
特務曹長であります中隊長殿お氣が
つかれましたかチ、小林自分は熱の
ために殆ど夢中だったア、濟まなか
つた小林ハイ敵の砲彈は聞ゆるがナ

セ味方は應戦しないのだハイ中隊長
殿我軍は既に彈丸はつきましたナニ
彈丸がつきたかハイシテ糧食はハイ
糧食も水も一切つきたのです、ム、
さうか何にしてもこの重圍を切ぬけ
て空閑少佐殿の大隊長連絡をさらな
ければならないイヤ中隊長殿いけま
せん、あなたは非常な高熱です動い
てはいけません何だ何だこれしきに
何をいふのだイエ中隊長殿危険です
熱の下るまで懸壕にお出で下さいエ
ハ馬鹿ナ自分は戦線での死を決して
出征したのでも中隊長殿は御病氣
です御重体です病氣が何だサア進む
のだイヤ懸壕にゐて下さい頻りに敵
が狙ひ打をしますあんなヒヨロく
の敵彈が當るものかイヤ危険です、
エイ生きのこつた兵を集めてくれ、

ハイエー、上官の命令を背くのかハイ
 はつき答へて小林はかしこへ急ぎ走
 り行く又もや熱のさしぐちにウン
 くくく大地にまろび身を悶え
 正氣は何ぞ有明の空に不思議や前線
 にあるべき筈の鈴木中尉正体何ぞ尾
 山が前スツクま立つて尾山中隊長殿
 く夢かあらぬか呼ぶ聲の耳に通じ
 てオツ空閑大隊長殿の副官鈴木中尉
 かハイ残念ですごうした、大隊長空
 閑少佐殿は戦死されましたエツ爾後
 大隊一切の指揮をこつて下さい前線
 は全滅ですもう指揮する者は一人も
 居りませぬお願ひしますオツ大隊長
 殿は戦死されたかム、残念だダダ
 大隊長殿鈴木中尉くゴホンく
 く中隊長殿残餘の兵を集めました
 中隊長殿くお氣がつかまりましたかチ

小林残念だ大隊長空閑少佐殿は戦
 死されたぞ、もう連絡の道はない徒
 らに重圍を衝いて多くの兵をみだり
 に敵地の土と化せしむるよりは、一
 旦戰場を離脱して天樂寺の本隊へ引
 揚ぐるのだ、用意せい早くア、
 イヤ中隊長殿敵は空閑大隊長殿の仇
 です、進んで彼等と戦ひませう、皇
 國の兵は後退するのは不名誉です、
 イヤ再擧をはかるのだ飛んで灯に入
 る愚策を致てしないのだ各兵あこへ
 熱が言はずか幻覺錯誤これぞイ思議
 の運命にあやつられたる悲壯の變事
 涙は土をぬらせども上司の命令是非
 なくも恨みをあさに引あぐる
 實に運命のいたづらか南京へ引かれ
 たる空閑少佐は敵將の甘海瀾に助け
 られ身は浮草の岸近く折しも外にお

さなふ聲、空閑少佐殿お眼覺めか甘
 少佐です傷の痛はありませぬかチ、
 甘少佐殿僕は嚴家楮の激戦に倒れ人
 事不省のま、捕虜となりこの衛戍病
 院に收容せられ恥をしのぶこの日夜
 親身も及ばぬ貴下の配慮空閑昇感謝
 の外ありませんイヤそれは貴國に於
 て日本陸軍の教えをうけた甘ですお
 助けしたのも所謂東洋精神と云ふの
 でせう武士は相互ひですア、有難う
 しかし空閑は却て此情けを受けたく
 はありませんでしたお察し申ます、
 今日わが部隊への報告に第五中隊長
 尾山大尉は前進の指揮をあやまり多
 くの部下を犠牲にしたる自責の念に
 堪えず自殺を計られたこの確報があ
 りました、ナニ尾山大尉は自及した
 か、フーンしかし貴官も當衛戍病院

にて幾度も自殺をはかられたがいつも私は少佐殿を保護して居りました感謝します僕は敵の情で生きてゐる事は鐵丸を呑むよりもつらかつたです、甘介彌殿これを見下さい渡す一書を手に取り上げ我運拙くして負傷さりにこなる武人の不名譽これにすぎず名を惜む是則ち武士道我は武士の本領を忘れずア、お立派なお覺悟です、しかし折角快方にむかはれたのです少佐殿貴國の爲に命を大事にして下さい自分は明日日本隊へ歸ります、お國元へ御用あればこの甘まで遠慮なく申し置下さいハア有難うではこれでお別れ致します互ひの握手暮山の雲か涙の雨又逢ふ時も敵味方四鳥の別れあはれなる

歌

か
M かりの世をからくに人の情けにてけふもむなく暮しつるかな

アけふは彌生の下八日聯隊長林少將閣下には我軍との連絡の絶えた爲又我軍は尾山大尉の中隊と呼應の出来なかつた爲、ア、聯隊長殿はこの敵家楯で討死されたのだ聯隊長殿空閑は恥をしのんで戻りました私は武運に恵まれなかつた哀れの殘骸です閣下を危地におさし入れあまつさへ多數の部下を戦場の土さ化せしも不肖の責ナセ僕は戦場で重傷を受けた時其儘に死ななかつたのだから僕はナセ敵の介抱なぞを受けてのめく戻つて来たのだからア、恥だ恥だ閣下僕の自決を許して下さい閣下のお

傍へ行つて親しくおわびをいたします部下の兵も濟まなかつた今すぐそこへ行くと軍刀ぬかん手をかくれどぬきもならざる腰刀にフム奮戦格闘の結果軍刀は間にあはないのか、腹十文字に切腹するのが武士たるもの、本懐ながらア、止むを得ん、拳銃取り出し故國に向ひ父上葉がくれ論語のお教への如く昇は自決します不肖も空閑家祖先傳來の武士の血を繼承して居ります戰場に於ても其他に於ても決して臆病をましき事や未練がましき事はつゆいさ、かも致しませんでしたごうかこれをもつて私のすべての不幸をお許し下さいオイかん子お前はわしの出征する時妊娠だつたなわしはごうした事が子供が

一倍可愛い、休暇の時は兼六公園を
子供と一緒に散歩することが何より
愉快だった。どうか子供にお父上への

らん血に書つゝる日記の一節悲惨の
まゝの一ページかくと涙のにじむな
り。

孝養を怠らぬやうよつく言ひつけて
くれいゝかゝハ、吾ながら愚
痴だもうすべては故郷へ遺言状とし
て届けて置いた。瑞子正和お前は軍
人の血を享けてゐるのだ立派に成人
して皇國のため天皇陛下の御爲に盡
してくれ鬼をもひしぐ勇將も子の愛
着にひかされて涙は雨さふるさこの
M かげれば異郷にさらすとも名は
千載のこるなる武人の典型空閑少
佐最期ばさても潔きやまこの花さ
惜しまるゝ尾山大尉もろごもに上海
戦の裏面の秘史あはれや世々に傳ふ



映畫 最後の審判

新興キネマ特作

監督 原田 裕行
脚色 上島 弘量
印刷 南島 裕行

配役

勝野道子……………英村百合子
古河少事……………津木勝彦
健 年……………鈴木勝彦

【梗概】ある田舎の小学訓導道子は受持の一兒童古河健が密かに金を蓄へてゐるのに不審を抱き色々事情を訊いたが健は一口も答へなかつた。ある日——體操の時間に健が空腹の爲に倒れた時醫師より意外な事を教へられた、健は親がなくその上祖母も病氣だつた子供心に考へて夜こなるこ甘酒饅頭を賣つてそれで薬代を稼ぎ、祖母を安心させるために毎日空の辨當箱を持つて通學してゐたのだつた——この事を見せられて道子は涙ながらに健に詫びた——かくて十七年の歲月が流れた、道子は今勝野豊司の妻として仕へつゝ相變らずその町の學校に教鞭をとつてゐた。その頃子供達の間にまで知れ渡つた兇盜「鶴嘴の虎」がこの町に入り込んだといふ噂が起つた。そして暴風雨の夜と共に町中

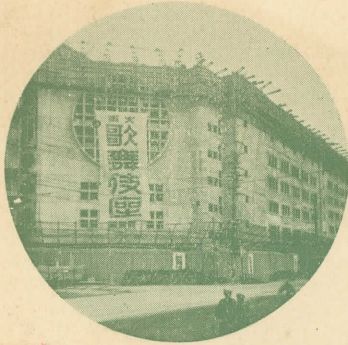


は飄然とした、折悪しく夫が署名で出張した留守を守る道
 子は一層不安に脅かされた、留守の間に——ピストルま
 で持たして出かけたほど人一倍嫉妬深い夫を守る道子の枕
 許にヌツと虎が現れた——彼の脅迫の前に必死の反抗をし
 た、虎は金だけを奪つて逃げた、道子の急報によつて虎は
 遂に捕縛されたのである、町は平和を取り返した、然しそ
 の中に面白からぬ噂も立ち始めた。
 彼女が將來の純情から虎を憐んで監房に差入れ辨當をし
 てやつたからである。この妻の噂を聞いて歸つて來た勝野
 は怒り道子の辯解に耳もかさずにピストルを取りあげ採み
 合ふ中あやまつて發射されたピストルに夫は倒れて了つた
 道子は遂に有罪と認定された、中澤校長、木村訓導、教へ
 子の魚屋金太の無罪説も聞き入れられなかつた、しかも三
 枝事件は病氣の爲、新たにこの事件を受持つたのは峻烈鬼
 法官の異名ある、古河検事である——絶望の中に公判の日
 は來た、そして検事の論告が始つた——この時古河検事な
 る人は十餘年前の「辨當事件」を引用して道子の人格を信
 頼するに十二分だと論結したのである。
 間もなく——晴やかな人々を乗せて自勵車は古河検事の
 家へ着いた、古河検事その人こそ幼少の礎であつた。道子
 は救はれたのである。

選入賞懸「日每一デンサ」

大阪歌舞伎座

上演脚本本發表



入選三篇

出誕迫る演劇の錦城へ

輝きでる劇壇の收穫

待たれる今秋のコケラ落し

萬人待望の焦點！未來の大阪文化を約束する新しい演劇殿堂——大阪歌舞伎座開場記念興行を意義あらしめるため、大阪毎日新聞社が『サンデー毎日』誌上に於て、さきに賞金二千圓を懸け開場記念興行上演脚本を募集しましたところ、この計畫は一般多大の同感を以て迎へられ応募總數實に千二百二十一篇の盛觀を呈しましたこれはさりもなをさず、演劇と大衆の交渉がより深まり、一般に演劇そのものに對する親しみが密接になつたこと、また他方、劇文學に對する理解が普遍化され、多くの有爲の人々によつて劇化がなされつゝあることを裏書するもので同時に演劇が單なる低調な娛樂物としてのみ存在物だつた時代を一步抜き出で、本當に演劇そのものが、われらの生活に、いかに重要性を具備してゐるかといふ認識が強調されてきた證左で、實にわが國劇壇のため慶賀すべき現象です。選に當つた大阪毎日新聞社編輯局各關係者は、この應募各位の熱意に動かされて再三慎重なる詮衡を遂げた結果、茲に愈よ大阪歌舞伎座の開場を飾るにふさはしき力作三篇の入選を發表と共にこの新劇場に送り出すことになりました

一等一篇【賞金一千圓】
歌舞伎名所圖會（一幕三場）
東京市麹町區三番町三井地

三好次郎

二等二篇【賞金各五百圓】
秀吉と家康（一幕三場）
東京市外高田區高田町ケ谷
一一二四市川しげ方

伴槇彦

堂島繁昌記（二幕）
東京市小石川區宮下町四番地

大村嘉代子

爽秋九月のお集ひは

手間のかゝらぬ

「文樂座の御宴會」

お決め下さい。

御觀覽席から食堂の卓子まで

皆様御一緒にお親み深う御座ぬます。

お一人様分

金三圓五十錢

御場席は……一等椅子指定席
御食事は……氣の利いた卓子
附……役割と床本入
番……人形を入れた特別撮影
記念寫真……(即日お持歸り出来る様速成)

お申込は廿八様以上五日前にお願致します

承り電話南四七一一番

郷土趣味豊かな場内の感觸
明朗生鮮な食堂の新氣分

